

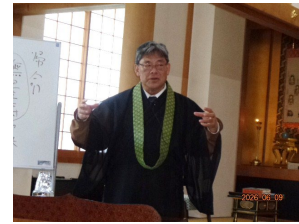
法栄寺歳時記

2026年
7月15日
第155号
発行
法栄寺門徒会

法栄寺定例法話会

六月九日（火）午後一時より定例の法話会がありました。この日の講師は、昨年の十二月にもご縁を頂いた石狩市浜益の天正寺住職 嶋地 正孝 師でした。

三帰依文唱和、簡単な自己紹介に続き、報恩講の案内に添付したというプリントを朗読されました。生まれて死んでいくのが自分のいのちと思っているが、無量寿の教えは、私達のいのちは、沢山のご縁によって繋がって生まれてきた。沢山のご縁によって生かされている。ご縁が尽きて亡くなっていく。ご縁に依って生きていると説かれました。



南無阿彌陀仏として頂くのが、浄土真宗のいのち、仏教のいのちと説かれました。生まれて死ぬは迷いと説かれました。

昨今は、自分のいのちは自分のもの、好きに使っていいと自分の都合でしか考えられなくなっている。本当の意味を感じられない世界にいる。自分のいのちの深さや重さを感じさせてもらう世界が南無阿彌陀仏と頂くと説かれました。生かされているというのは、仏様しか分からない。我々も、何かを失った時、気付くことがあるが、阿彌陀のはたらきと説かれました。

かれました。南無阿彌陀仏を称えて良いことがある訳でない、手が合わさり頭が下がる世界を、人生の中で頂けたことが、一番の宝物と説かれました。観無量寿経について、要門であり、実践・生活を説いているそうです。その中に、像観といって、方便としての像を見て、はたらきを感じさせてもらうというのがあると説かれました。

法栄寺定例法話会

七月九日（木）午後一時より定例の法話会がありました。この日の講師は、十六年前にもご縁を頂いた、丹波篠山法傳寺住職 長田 浩昭 師でした。

三帰依文唱和に続き自己紹介を兼ね御当地紹介もありましたが、お話全体、プロジェクトを駆使し、視覚的にも訴えられました。本日のテーマは「震災と親鸞聖人の歩み」ということで、親鸞聖人の生涯を年表で示されました。



お仏飯について、蓮華の実に似せたもので、泥の中に仏法の花を咲かせる、凡夫の生活の真つただ中に念仏のいのちを育む、今日一日沢山の人にお世話になってこうやって生きている確認作業、一日を始める門徒の生活と説かれました。

震災直後の港の様子・破壊された道路・倒壊した家屋や寺院の生々しい映像が胸を打ちました。奥能登は、人口六万人の所に大谷派の寺院が百八十ヶ寺あり殆んどが真宗門徒という土地柄だそうです。その寺院の百四十ヶ寺が大きな被害を受けたそうです。

そこで、避難者に出てきてもらうべく、居酒屋風僧侶炊き出しとし、アルコールも提供したそうです。当然、全て無料ですが、全国からの義援金に依るそうです。



その九十年の生涯の中で、注目すべきは、十一回に及ぶ大地震・三回に及ぶ大飢饉に遭遇したこと、どのように対峙されたのか、気になるという事です。この後暫く、一昨年の元旦に発生した能登の大地震に関して話されました。講師本人は、奥能登の出身で、三十五歳まで生活していたそうです。兄弟・親戚・同級生・寺の仲間等全て被災者になったそうで、発生後十二日目に現地入りしたそうです。

こんな能登で、ボランティアの為の宿泊所を開設したそうです。二五〇〇人を超える支援をしたそうです。更に、避難所の前にテントを張り、炊き出しもしたそうです。しかし、コロナ禍もあり、炊き出しは直接避難者に渡すことは出来なかったそうです。

法栄寺門徒会奉仕活動

【清掃奉仕】六月三十日（火）午前十時より草刈りと雑草取りをしました。草刈は、役僧の宮武氏が活躍しました。他の参加者は、境内の草取りをしました。

《奉仕活動参加者》敬称略
竹内、三上夫妻、楠美、大島夫妻

